

引用について

— 全ての言葉は潜在的に引用されている —

福 沢 将 樹

序章 はじめに

いきなり前後の脈絡なしに「引用」と聞けば、大方次のような理解をするだろう。

- (1) 自分の論のよりどころなどを補足し、説明、証明するために、他人の文章や事例または古人の言を引くこと。(『日本国語大辞典第二版』)
- (2) 他からコトバを引いて用いる、他にあったコトバをもってきて用いること、その表現 (藤田 (2000)、6頁)
- (3) コトバの再利用・再現 (藤田 (2000)、6頁)

しかし本稿では狭義の「ことば」に限らず、画像その他の表現を引く場合も含めて「引用」と呼ぶ。

なお文芸を含め、芸術研究の分野では、「引用」という語はかなり広義に用いられている¹⁾。即ち、文字通り一節を引くとか、「引き歌」のみならず、「本歌取り」や「パロディ」「パステイーシュ」の場合でも「引用」の語が用いられている。この意味で「引用」の語を用いると、人間の表現したものは全て「引用」ということになってしまう²⁾。しかしその意味での「引用」と、常識的な「引用」との間に、いくつかの段階差を認めておいた方がよいと思う。

本稿は、芸術研究の意味とは異なり、もう少し常識に近い「引用」の概念で考えるつもりである。しかし、それにも拘らず、全ての言葉(さまざまな表現を含む)が「引用」されているという結論に至る。第1章では「自分の言葉を引用する」という場合のあることを述べる。第2章では更に「リアルタイムの自分の言葉を引用する」という場合のあることを述べる。第3章では「引用を表すしるし」を用いなくて「引用」を表すことが可能なことを述

べる。その結果、「リアルタイムの自分の言葉」が、「引用を表すしるし」なしに「引用」されていることが論証されることになる。つまり、普通の表現は「引用を表すしるし」が付いていないが、にも拘らず、「引用」されているということである。第4章では先行研究との関連について述べる。

第1章 誰の言葉を「引用」するか

引用者が「引用」を行う場合、引用される言葉は誰によって作られた言葉であろうか。常識的には引用者とは別の「他人」の言葉であろう。しかしそうでない場合もあるので、この観点によって幾つかの類型に分けることができる。

1) 他人の言葉

多くの場合、「引用」と言えば別の人の言葉を引用するものである。

2) 過去の自分の言葉

しかし、自分の言葉を「引用」する場合もある。例えば私が以前書いた自分の論文から自分の文章を引用する場合である。これは今話して（書いて）いる場面とは別の場面で話した（書いた）言葉を「引用」するものである。このように、「過去の自分」の言葉は、「自分」の言葉であっても、引用することは不自然ではない。この場合、ある意味で「過去の自分」は「今の自分」とは「別人」と言えるかもしれない³⁾。

3) リアルタイムの自分の言葉

では、リアルタイムの自分の言葉を「引用」することは不可能であろうか。一見不可能な気がするだろうし、そもそも「引用」の必要性が感じられない気もするだろう。しかし、現代の話し言葉で「って」で終わる文の一種に「リアルタイムの自分の言葉の引用」が見られる。章を改めて論じることにする。

第2章 リアルタイムの自分の言葉の「引用」

第1節 自分の主張を表す「って」

『日本国語大辞典第2版』の「って」の項目に、次のようなものがある。(4)はその説明文で、(5)(6)はその用例である。

- (4) [二]《終助》・話し手自身の言葉を、聞き手に念を押すように語るときに用いる。イントネーションは高くない。本来あとに来る「言うんだ」「言うことだ」などの言葉を省略した言い方。
- (5) 「いいから俺にまかせて置けって。悪いようにはしないから」
- (6) 「外の野郎共も〈略〉面白半分、野治馬になって助太刀をする。いやはや、一時は騒ぎだったって」⁴⁾

用例(5)は、「まかせて置け」という発言を誰かが別の場面で言ったわけではなく、この話し手が今この場で初めて言ったものと思われる。つまりリアルタイムでの自分の気持ちを述べたものである。

問題は、「まかせて置け」という気持ちを「って」という表現で閉じているところにある。即ち、「って」という表現は、まるで「引用」を表しているかのように見えるのである。

第2節 「って」

「って」という助詞(?)の諸用法の全体像や、用法別のおおよその使用頻度については、『日本国語大辞典第2版』、三枝(1997)、丸山(2002)等によって知られる。文中で「連体」、「提題」、「逆接」などを表す用法もあるが、文末では「伝聞」「聞き返し」「主張」といった用法が見られる。このうち文末の諸用法に注目したい。文末の3つの用法のうち、「伝聞」用法と「聞き返し」用法は明らかに「他人」の言葉の「引用」である。しかし「主張」用法だけがそうではなく、「リアルタイムの自分の言葉」に後接するものである。「主張」用法がもし「引用」と無関係だとしたら、「って」によって表される理由が説明できなくてはならない。反対に「主張」用法もまた「引用」の一種だとすれば、今度は「引用」の中でのバリエーションの一つとして位置づ

けるだけで済む。

そこで本稿は、次のことを提案する。

(7) 「リアルタイムの自分の言葉の引用」というものがある。

主張用法の「って」を「リアルタイムの自分の言葉の引用」と捉えることに対して、問題になりそうな点は2点ある。一つは、実は「リアルタイム」ではなく、少し前に言った自分の発言をもう一度繰り返しているのではないかという点。もう一つは、「主張」用法の「って」は既に「伝聞」「聞き返し」の「って」とは別語となっているのではないかという点である。

1点目については、確かに繰り返しに近い場合はある。しかし、この種の「って」の用例の全てが必ずしも繰り返しというわけではない。従って、「主張」用法の用例の一部しか説明することができない。

2点目については、例えば音調が「伝聞」用法と異なっている点が強力な論拠となる。しかしこの音調の違いが、「語」を類別する「アクセント」に相当するものか、「文」レベルの「イントネーション」に相当するものかを明らかにしなくてはならない。もし後者だとしたら、必ずしも別語説は成り立たないと見るべきである。例えば疑問の「そうか?」と、自分で納得する意の「そうか。」において、2つの「か」は果たして別語であろうか。これは単語としては同一語であり、文としてイントネーションが異なると見るべき例である。従って、再び「伝聞」の「って」と「主張」の「って」が同一語の可能性が浮上する。そしてもし同一語だとした場合に「って」という語の諸用法を統一的に説明する論理は何かと考えると、「引用」というキーワードで説明するのが最も自然で簡便な説明ではないかと考えるわけである。

よって、(7)を再び確認することとする。そして次章ではこれを用いて、「って」を用いなくて「引用」を表す場合の存在することを確認することとする。

第3章 「って」「と」を用いないで「引用」を表す

第1節 「引用」の「しるし」

「引用」部分を「引用」だと聞き手（読み手）にわかってもらうためには、「引用」を表すための「しるし」があった方がよいだろう。その手段としては、例えば次のようなものが考えられる。

1) 「引用」の意味を持った形態素を用いる。

「と」「って」が代表的なものである。

2) 「引用」開始・終了の記号を用いる。

「かぎっこ」が代表的なものである。論文では前後1行空け、行頭を2字くらいずつ下げる方法を用いることがある（行頭については次の3）の技法である）。音声言語の場合は適当な手段がないかもしれないが、身振りを交えたり、何らかの効果音を挿入することによって、実質的に記号の役割を担わせることはできるだろう。マンガではコマの周囲に特殊な囲いを描くことがある。

3) 「引用」部分を、他と際立たせた表現方法で表す。

活字印刷ならフォントを変えたり（イタリック体など）、音声言語なら声色を変えたりする。論文では行頭を2字くらいずつ下げることもある。映画ならその場面だけモノクロやセピア色で映したり、その他の技法を用いることがある。マンガにも種々の技法がある。

しかし、特に「引用」である「しるし」を用いず、内容だけでわからせる場合も存在する。

第2節 「しるし」を用いない「引用」

美術の表現には「コラージュ」という技法がある。例えば写真や包装紙などの現物を貼付けたりする。これらは特に「引用」であることを明示しなくても、現物を見れば「引用」であることがわかる。写真にも「フォトモンタージュ」という技法があり、同様に「しるし」を用いずに「引用」を行う

ことができる。そして言語表現でも「しるし」を用いない「引用」は可能である。

- (8) 半年のうちに世相は変つた。^{しこ}醜の^{みたて}御楯といでたつ我は。大君のへにこそ死なめかへりみはせじ。若者達は花と散つたが、同じ彼等が生き残つて闇屋となる。もゝとせの命ねがはじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて。けなげな心情で男を送つた女達も半年の月日のうちに夫君の位牌にぬかづくことも事務的になるばかりであらうし、やがて新たな面影を胸に宿すのも遠い日のことではない。人間が変つたのではない。人間は元来さういふものであり、変つたのは世相の上皮だけのことだ。(坂口安吾「墮落論」⁵⁾)

(8)の引用部分には短歌(の一節)が引用されていることがわかるが、句点以外に特に「しるし」は用いられていない。古代語の語法であることや、五音七音の語呂のよさによって知られるのみである。当時の読者にとって人口に膾炙していたため、敢えて引用の出所を明示する必要がなかったという側面があったのかもしれない。これを敢えて「引用」の「しるし」を用いて書き換えると、次のようになる。

- (9) 半年のうちに世相は変つた。「^{しこ}醜の^{みたて}御楯といでたつ我は」とか、「大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」という歌があった。若者達は花と散つたが、同じ彼等が生き残つて闇屋となる。[…後略…]

見方を反対にすると、(8)のような表現は、(9)のような表現から(9)の傍線部を取り除いた表現と見ることができる。つまり、(9)の中の「引用」部分は、(8)のようになってやはり「引用」部分なのである。

同じような論理を「って」の「伝聞」用法にも当てはめるとどうなるだろうか。

- (10) あいつこんなこと言ってたよ。「いいから俺にまかせて置け」って。は

はは。

(11) あいつこんなこと言ってたよ。いいから俺にまかせて置け。ははは。

(11)は(10)から「引用」の「しるし」だけを取り除いたものである。(11)のようになっても「引用」部分は依然として「引用」部分である。

同じ論理は、「って」の「主張」用法にも当てはまるはずである。

(12) いいから俺にまかせて置けって。

(13) いいから俺にまかせて置け。

(13)は(12)から「引用」の「しるし」だけを取り除いたものである。「主張」用法でも「伝聞」用法と同様に、「引用」の「しるし」を取り除いた(13)は依然として「引用」部分であるはずである。しかし(13)のような表現は、普通「引用」部分を表すものとは考えられない。なぜなら、普通すぎるからである。つまり、「主張」を表す表現としては、むしろ(12)より(13)の方が無標でよく使われるものである。(13)が「引用」部分なのであれば、全ての文が「引用」部分だと言わなければならないそうである。これは常識に反する。

しかし本稿の主張は、実はこの「非常識」な見解である。即ち、理論的には次のような帰結が導かれるというものである。

(14) 全ての言葉は潜在的に引用されている。

この傍証としてもう一つの事例を取り上げることにする。

第3節 物語の末尾

口承文芸で、例えば「むかしばなし」を語る場合、始まりと終わりに特定の言い回しを用いる場合がある⁹⁾。文字に書かれた物語の場合も、そういう機能を持った言い回しを用いる場合がある。しかし口承文芸と比べて、なくても済むことが多いと考えられる。なぜなら、本の形になったものは、「本の形である」ということによって、最初と最後がわかるからである。

『源氏物語』を例にとることにする。『源氏物語』は54巻に分かれているが、それぞれの巻の文章の終わり方は様々である⁷⁾。「引用」の「しるし」が付されているものといないものがある。

(15) つれなき人よりはなかなかあはれに思さるとぞ。(帚木卷末⁸⁾)

(16) これはいとさま変りたるかしづきぐさなり、と思いためり____。(若紫卷末)

(15)(16)は、それぞれ(17)(18)のように書いても全く問題がないように見える。このような巻の閉じ方の違いにどういう意味があるのかはさっぱりわからない。

(17) つれなき人よりはなかなかあはれに思さる____。

(18) これはいとさま変りたるかしづきぐさなり、と思いためりとぞ。

(15)(18)には「引用」の「しるし」が付されている。故に、巻末2字を除いて巻の大部分の文章が「引用」であることがわかる。一方(16)(17)にはその「巻末2字」が付されていない。従って、(16)(17)は全文が「引用」ということになる。即ち(16)(17)は巻の全文が「引用」から成っているのである。

より一般的に言うと、次のようになる。即ち、どんな文章（発言）でも、その（始まりと）終わりに何か「引用」の「しるし」を付してやれば、「引用」の形で示すことができる。逆に言えば、どんな文章（発言）も、「引用」の「しるし」を取り除いたものと考えることができる。「引用」の「しるし」がないのは、それが「引用」じゃないからではなく、「引用」だがわざわざ示すまでもないからである。従って、(14)のように、「全ての言葉は潜在的に引用されている。」ということになる。

「全文の引用」ということに関して、興味深い文学作品を二つ取り上げることとする。一つは芥川龍之介の「藪の中」であり、もう一つは太宰治の「道化の華」である。

「藪の中」は、7人の登場人物の談話の「引用」から成っている。各談話の

冒頭には「検非違使に問はれたる木樵りの物語」⁹⁾のような小見出しが付されているので、誰の談話がどこからどこまでかははっきりと示されている。しかし各談話を繋ぐ役目の「地の文」が全く書かれていない¹⁰⁾。「地の文」に相当するものを強いて挙げれば、「小見出し」や、各談話の途中に「(長き沈黙)」のように挿入された注釈や、「***」のような記号がそれに当たるだろうか。つまりこの作品は、「パッチワーク」のように「引用」だけから成っている文章と言って過言ではないのである¹¹⁾。

「藪の中」とは反対に、妙な地の文が大量に書き込まれているものが「道化の華」である。

(19) 「ここを過ぎて悲しみの^{まち}市。」

友はみな、僕からはなれ、かなしき眼もて僕を眺める。友よ、僕と語れ、僕を笑へ。ああ、友はむなしく顔をそむける。[...] もつと言はうか。ああ、けれども友は、ただかなしき眼もて僕を眺める。

大庭葉蔵はベッドのうへに坐つて、沖を見てゐた。沖は雨でけむつてゐた。

夢より醒め、僕はこの数行を読みかへし、その醜さといやらしさに、消えもいりたい思ひをする。やれやれ、大仰きはまつたり。だいいち、大庭葉蔵とはなにごとであらう。[...]

[...]

大庭葉蔵。

笑はれてもしかたがない。鶉のまねをする鳥。見ぬくひとには見ぬかれるのだ。よりよい姓名もあるのだらうけれど、僕にはちよつとめんだうらしい。いつそ「私」としてもよいのだが、僕はこの春、「私」といふ主人公の小説を書いたばかりだから二度つづけるのがおもはゆいのである。[...] ほんたうは、それだけの理由で、僕はこの大庭葉蔵をやはり押し通す。をかしいか。なに、君だつて。(太宰治「道化の華」¹²⁾)

一読しただけではわかりにくいかもしれないが、この作品全体の「語り手」は、今小説を執筆している最中らしい。そして冒頭から「沖は雨でけむつて

みた。」までは、その小説の文章が引用されているらしいのである。そして「夢より醒め」から「なに、君だつて。」までは、その「語り手」=小説の作者が胸中で呟いている独白が書き込まれているらしいのである。この後1行空けて再び執筆中の小説の文章が挿入される。このように、中に「引用」されている小説の文章の間に、その小説の「作者」の呟きが頻繁に挿入されながら進行する作品である。

このような書き方を見ると、作者の呟きの間に小説が「引用」されているのか、小説の中に作者の呟きが「引用」されているのか、よくわからなくなってくる。所謂「図」と「地」の反転である。

(14)の「潜在的引用」ということを考える際に、「図」と「地」の反転という観点は重要である。つまり、通常「引用」というのは「主」に対して「従」の地位になければならない¹³⁾。つまり「引用」部分の方が多くなつてはいけないのである。しかし「潜在的引用」とは、「引用」部分が「主」になっている。これは常識に反する。そこで、「図」と「地」を反転させて、「引用」部分以外の何もないところを「主」と見なす必要が生じる。

第4章 先行研究との関連

では、これまでの学問的研究の中で、「潜在的引用」に当たるものはどのように指摘されてきたのであろうか。本章ではそれを問題点という形で考察してみたい。

第1節 誰が引用しているのか

第一に問題となりそうなことは、「引用されているといっても、誰が引用しているのか」ということだろう。しかしこの問いに、単純な答え方をすることが許されるなら、次のようになる。即ち、「自分で自分を引用している」ということである。或いは、「こっちの自分があっちの自分を引用している」ということになる。福沢(2004)の概念を用いると、「こっちの自分」と「あっちの自分」との関係は、〈同一人物〉であるが〈別人格〉であるということになる。

このような、文章の外側にいて文章を「引用」している主体のことを、先

行研究では何と呼んでいたのだろうか。「表現主体」や「話し手」と呼ぶこともあつただろうが、これらの用語は適当でない。なぜなら「こっちの自分」と「あっちの自分」とを区別できないからである。そこで筆者は〈潜在的引用者〉という用語を提唱する。福沢(2002)で述べた記述を以下に再録する。

- (20) 文章を潜在的に引用する者を、人格的比喩を以って言い表したものを、〈潜在的引用者〉と呼ぶ。

〈潜在的引用者〉は、自分の意見・感想・観察等の内容を直接表現することはない。また、文章に表現されている内容の信憑性を保証することもない。但し、文章の配列・取捨選択等を行い、それによって間接的に意見を窺わせたり、文章の内容の信憑性を高めたり疑わせたりすることができる。

この概念は、文学理論で「implied author」(内在する作者)と呼ばれているものにヒントを得たところがある。これはBooth(1961)が提唱し、Chatman(1978)(1990)が発展させた概念である。二人の定義は若干力点が異なっているが、いずれも基本的に文学作品を分析するための概念である。しかし筆者(福沢)は文学作品も日常会話も等価に扱うことを目論んでいるため、「implied author」をそのまま用いるわけにはいかない。例えば、「author」という語のニュアンスが、日常会話には不似合いな点があるからである。


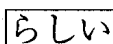
第2節 「引用」部分の外側には何があるのか

もう一つ問題となりそうな点として、統語論的な問題がある。即ち、「と」「って」を用いない「引用」文は、「と」「って」の代わりに何があるのか、何もないのか、という点である。

この点について、すぐ連想するものとして、時枝(1941)の「零記号」、Ross(1970)等の「遂行分析」、それから、多少牽強附会の譏りを免れないだろうがChomsky(1986)の「CP」が挙げられる。

「零記号」は、次のような例文によって説明される。即ち(21)の「犬走る」という文の後に、何らかの統語的要素を想定するのである。その要素とは、(22)

(23)の「か」「らしい」の代わりになるようなものである(例文は252~253頁のもの)。

- (21) 犬走る 
- (22) 山は雪 
- (23) 外は雨 

次に遂行分析とは、単純化して次のように言っても大きな間違いはないと思う(例文(24)は224頁のもの。(25)は同頁のものを引用者(福沢)の解釈により書き換えたもの)。即ち、(24)のような文は、実は(25)のような意味であるというのである。つまり全ての平叙文に潜在的に「I TELL YOU」のようなものが存在することになる。

- (24) Prices slumped.
- (25) I TELL YOU prices slumped.

最後に「CP」とは、「Complementizer Phrase」の略である。「Complementizer」とは、節(ここでは「文」と呼ばれる)を後に続けるときの「that」「which」「who」などのことである。例えば間接話法で「引用」された節の頭に「that」が置かれることがある。置かれないこともあるが、統語上、「that」の置かれる位置が元々存在すると見なす。これが「引用」された節だけでなく、主節の頭にも同様の位置が想定されるのである。例えば(24)の例文をそのように解釈すると次のようになる。即ち、文の頭に「C」というthatのようなものがあると想定するのである¹⁴⁾。つまり全ての平叙文に潜在的に「C」が存在することになる。

- (26) C prices -ed slump

しかし最初の二つは、実は〈潜在的引用者〉とはレベルの異なるものである。このことを論ずるために必要なことは、「話し手の気持ち」がどういう統

語的要素に宿っているかという観点である。「零記号」はこれ自体に「陳述」というものが備わっているとされる。「遂行分析」の「I TELL YOU」にも、話し手が聞き手に対して働きかける気持ちが籠っている。これら「話し手の気持ち」は、〈潜在的引用者〉にはないものである。〈潜在的引用者〉は、ただ「引用」するだけであって、感動や主張の気持ちは持っていない¹⁵⁾。感動や主張の気持ちは「零記号」や「I TELL YOU」の中に入っているのである。つまり、〈潜在的引用者〉の存在する位置は、「零記号」や「I TELL YOU」の更に外側なのである。

その意味では、〈潜在的引用者〉に最も近いものは、「CP」なのかもしれない。しかし当のChomsky自身はそうは考えていなかったのではないかという気がする。よって「CP」が〈潜在的引用者〉かどうかは疑問としておく。

終章

本稿で主張したことは、次の2点である。

- (27) = (7)「リアルタイムの自分の言葉の引用」というものがある。
- (28) = (14)全ての言葉は潜在的に引用されている。

注

- 1) 例えば宮川(1975)や勝又(2003)など。
- 2) Kristeva(1967)の中の以下の文章がしばしば引かれる。クリステヴァ自身はこれをバフチーンが発見したものだとしている。しかしクリステヴァ自身はこのことをどのくらいの射程範囲で考えていたのか、あまり詳述していないので不明である。
[...] どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にほかならない [...] (訳書61頁)
- 3) 福沢(2004)の概念では〈同一人物別人格〉の現れ方の一つとなる。但し、「過去の自分」ならどんな場合でも〈別人格〉になるわけではない。
- 4) 『日本国語大辞典』には「当世書生気質(1885-86)〈坪内逍遙〉一〇」とある。明治文学全集『坪内逍遙集』では111頁下段にある。
- 5) 『坂口安吾全集04』筑摩書房、1998。仮名遣い、ルビ等は基本的に原文のママ。
- 6) 柳田国男『昔話覚書』のうち「昔話採集者の為に」(初出1931)、「昔話の発端と結び」

(初出1943)、「追記」(1957)にある。

- 7) 以下の論点は福沢(2002)で既に触れたところがある。
- 8) 以下の引用は小学館古典セレクション『源氏物語』1・2(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(校注・訳)、1998)による。傍線は福沢による。
- 9) 『芥川龍之介全集 第八巻』岩波書店、1996。
- 10) 熊倉(1990)に同趣旨の指摘が見られる。
- 11) 理論的には、完全に「パッチワーク」だけから成っている作品もありうる。映像については、注13)で問題になったような作品がある。文章でもきっと有名なものがあると思うのだが、残念ながら筆者(福沢)にはなかなか思い当たらない。御教示を仰ぎたいところである。

なおこうした完全パッチワーク作品が存在した場合、発言者が2~3人程度ならまだ無理なく読めるだろうが、大人数になってしまうと、誰の発言がどこまでなのかを理解するのが非常に困難になることが予想される。筆者のゼミ参加者の中に、エリソンド(作)『ファラベウフ あるいはある瞬間の記録』を取り上げた学生がいた。この作品は、誰かの独白と誰かの発言の引用とから成っているらしいのだが、誰の発言がどこからどこまでなのかはわからず、そもそも登場人物が何人いてどんな出来事がどういう順番に起こったのかさえまるでわからないような書き方がされている。完全パッチワーク作品は、こうした実験的なものになりやすいのではなかろうか。

- 12) 『太宰治全集 2 小説 1』筑摩書房、1998。漢字は通行の字体に直した。仮名遣い、ルビ等は基本的に原文のママ。
- 13) 昭和55年3月28日最高裁第三小法廷判決、判決要旨一。

旧著作権法(明治三二年法律第三九号)三〇条一項二号にいう引用とは、紹介、参照、論評その他の目的で自己の著作物中に他人の著作物の原則として一部を採録することをいい、引用を含む著作物の表現形式上、引用して利用する側の著作物と、引用されて利用される側の著作物とを明瞭に区別して認識することができ、かつ、右両著作物間に前者が主、後者が従の関係があることを要する。(『最高裁判所判例集』34-3、1980年。傍線部は引用者(福沢)による)

この事件は、スキーのシュプールを撮影した写真に、自動車のタイヤの写真を重ねて合成した作品について争われたものである。「フォトモンタージュ」の技法であり、「引用」のみから成り立っている作品である。

- 14) 「slumped」が「-ed slump」になっているのは、ここでは無視して差し支えない。
- 15) 但し何らかの意図は持っている。例えば、ある主張を表す文を引用したとしよう。その場合、自分もその意見を世に知らしめたいという意図を持っているかもしれない。反対に、そのような馬鹿な意見を曝すことによって、その元発言者を笑い者にしようという意図を持っているのかもしれない。いずれの場合も、その文の主張をしているのはその文の元発言者であって、〈潜在的引用者〉ではない。ただ、元発言者の意図と〈潜在的

引用者〉の引用意図が一致する場合が多いのである。

2004年10月30日に本学公開講座「言葉——はっする言葉」において講演を行った。講演時には「引用のかたち——全ての言葉は潜在的に引用されている！——」の題目で行った。本稿はそれをだいぶ改稿したものである。

参考文献

- 勝又 浩(2003) 『引用する精神』 筑摩書房
- 熊倉千之(1990) 『日本人の表現力と個性 新しい「私」の発見』 中央公論社
- 三枝令子(1997) 「「って」の体系」『言語文化』 34
- 時枝誠記(1941) 『国語学原論』 岩波書店
- 福沢将樹(2002) 「文章を潜在的に引用する機能について」 田島毓堂・釘貫亨(編)『名古屋大学日本語学研究室 過去・現在・未来』 名古屋大学大学院文学研究科
- 福沢将樹(2004) 「語りの諸類型」『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』 52
- 藤田保幸(2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院
- 丸山直子(2002) 「話しことばの助詞——「って」を中心に——」『東京女子大学日本文学』 98
- 宮川 淳(1975) 『引用の織物』 筑摩書房
- 柳田国男(1998) 『柳田国男全集13』 筑摩書房
- BOOTH, Wayne C.(1961) *The Rhetoric of Fiction*. The University of Chicago Press. (米本弘一・服部典之・渡辺克昭(訳)『フィクションの修辞学』 水声社(1991)による)
- CHATMAN, Seymour(1978) *STORY AND DISCOURSE: Narrative Structure in Fiction and Film*. Cornell University Press.
- CHATMAN, Seymour(1990) *Coming to Terms: The Rhetoric of Narrative in Fiction and Film*. Ithaca, Cornell University Press.(田中秀人(訳)『小説と映画の修辞学』 水声社(1998)による)
- CHOMSKY, Noam(1986) *Barriers*. Cambridge, Mass. MIT Press. (北原久嗣・小泉政利・野地美幸(訳) 外池滋生・大石正幸(監修))『障壁理論』 研究社出版(1994)による)
- KRISTEVA, Julia(1967) Bakhtine, le mot, le dialogue et le roman. *Critique*, 239. (ジュリア・クリステヴァ(著) 原田邦夫(訳)『記号の解体学 セメイオチケ1』 せりか書房(1983)による)
- ROSS, John Robert(1970) On Declarative Sentences. JACOBS, Roderick A. & ROSENBAUM, Peter S.(eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. Ginn and Company.